

近世期木板印刷の改刻

— 芝居双六の場合 —

佐藤 知乃

The Sugoroku Material Printed by Woodblock

Sato Chino

Abstract

“*Sugoroku*: actor NAKAMURA Tomijuro will achieve a successful career in three years” is a board game featured in Kabuki. This paper analyzes *Sugoroku* material in relation to theatrical information. It was first printed in the city of Edo by woodblock in 1737. It was printed again on the occasion of Tomijuro’s appearance in Edo in 1742. However the woodblock was changed partly for Tomijuro. So present-day material has inconsistent information. The *Sugoroku* material of 1742 was printed during a short period hoping for Tomijuro’s success.

双六が日本にもたらされたのは奈良時代以前である。これは盤双六で、バックギャモンの古いかたちの遊戯であった。賭博にふかく関与したところから、しばしば取締まりの対象となったが、一方では教養階級のもて遊びとなり、その遊戯の様子は諸文芸に描写され、画証も多い。双六盤は碁盤に勝るほどに大きく、蒔絵や螺鈿をほどこした豪華な品がこんにちにも残る。そのような双六盤が持ちあつかいには不便だというので、これを紙上に再現しようとしたものを、盤双六に対して絵双六とよぶ。われわれの記憶にある双六もこちらのほうだろう。

絵双六は、宗教的な仏法双六、浄土双六を先駆けとし、やがてより娯楽的な道中双六や芝居双六などが考案され、急速に広まっていく。肉筆の作例もあるが、現存資料のほとんどは木板印刷である。近世期の商業出版の開始は文化環境を大きく変化させたが、絵双六の急速な普及の原動力もそこに求めることができる。近代以降も多様な展開を示し、それらは主題別に、教訓、道中、芝居、出世、歴史、名所、遊芸、文芸、開化教育、女、戦争、探検旅行、宣伝、子供、漫画等に分類される¹⁾。

シルクロードの最果てのさらに向こうにルーツをもち、日本遊戯史の一角を占める双六のうち、ここでは江戸期の絵双六、とくに芝居双六をとりあげて考察をおこなう。

一、「中村富士郎〈三年立たら／極の字が付〉ませう双六」について

東京国立博物館に所蔵される絵双六の一大コレクションに、『双六類聚』貼込帖がある（歴資七〇九²⁾。このうち

に「中村富士郎（三年立たら／極の字が付）ませう双六」が所収される〔図版1〕。一枚物で墨摺、大きさは二八・五×四三・五センチメートル（左端トリミング）。絵双六は、賽の目の数に合わせてコマを進める廻り双六と、数に応じて進む先が指示される飛び双六に分かれるが、これは右下の区画（一）を振り出しとして反時計回りに進む廻り双六で、一周半して区画（一八）が「上リ」である〔図版2〕。区画番号順に翻字を示す。

〔題名〕（紋）中村富士郎（三年立たら／極の字が付）ませう双六

〔本文〕

上上吉 市村「空白」

とうなんのたちはなはいつでも大いりの芝居町（二）

上上吉 角かづら 市川団十郎

市川のわかばへあら事のこなしはやふさ町（二）

上上 嵐小伊三

〔諸〕けいすくなけれどやふ入がすき屋町（三）

上上吉 三条かん太郎

女かたよりたちやく□すこしたるいしろかね町（四）

上上 弥木菊松

はるくとなごやから河原さき座ゑすみよし町（五）

上上 大谷竜左衛門

あたまかちにてしりのないどう□りまち（六）

上上 坂田市太郎

きみのひとふしにはけんぶつがよだれをなかつかし町（七）

上上吉 市川団蔵

一兩年ひやうばんがうすうなつたひかげ町（八）

上上 袖崎菊太郎

ゑひがひげにとりついて今度から一まいにいりゑ町（九）

上上吉 中村七三郎

そかの十郎からめきくとひやうばんがよした町（一〇）

上上吉 瀬川菊次郎

ものごしはうくいすもはだしはやざきの梅のむろ町（一一）

上上吉 市川宗三郎

じつあくのかいさんがとうゑどにながい町（一二）

上上吉 姉川千代三郎

ぬれ事にまちつとてのと、かぬさる屋町（一二三）

上上吉 萩野伊三郎

たちやくからよく女かた二のりかゑはくろう町（一二四）

上上吉 富沢門太郎

けいせい事をなされたらよかろうと宮人がい、たまち（一五）

上上吉 大谷広次

せつせうせきの狂言からひさくにておなが高さご町（一六）

上上吉 瀬川菊之丞

わか女がたのすいいちゑりどりてなんでもうでをするか町（一七）

上り

さころも二中村富十郎 所作大だけ

八まん太郎二中山新九郎 所作大しよさだけ

いわ戸左衛門女ぼう二瀬川菊之丞 なり平の所作大当り（一八）

板元不明で絵師も不詳だが、絵は初期鳥居風で、絵師たちの活動範囲から、板行時期は享保期の江戸と判断することができる。区画（一七）までは、役者の半身像を扇面形（もしくは団扇形）で囲む。囲みによって半身像が強



図版1 芝居双六「中村富十郎〈三年立たら／極の字が付〉ませう双六」
 (東京国立博物館所蔵【双六類聚】所収)

調されるこの手法は、明和七年(一七七〇)刊の役者絵本『絵本舞台扇』が全面的に採用して注目を集めたが、この双六も含め、初期にも作例が散見される。添書はすべて見立江戸町尽しとなっている。こうした見立何々尽しを役者名に添えるのは、後述する役者評判記の役者目録にならったやり方である。

題名中の「中村富十郎」は役者名で、江戸時代に二代目であるが、二代目が活動したのは後期の大坂であるから、この富十郎は初代(二七二―八六)のほうである。また「極の字」は役者の位付に関わるもの。江戸時代の三大都市である京・江戸・大坂の大劇場に出演する歌舞伎役者たちは、江戸時代を通じてほぼ定期刊行された役者評判記により、立役や若女方などの役柄別にランキングされた。

(題名)				
市川團藏 上上吉 (八)	袖崎菊太郎 上上 (九)	中村七三郎 上上吉 (一〇)	瀬川菊次郎 上上吉 (一一)	市川宗三郎 上上吉 (一二)
坂田市太郎 上上 (七)	瀬川菊之丞	中山新九郎	中村富十郎 上上 (一八)	姉川千代三郎 上上吉 (一三)
大谷竜左衛門 上上 (六)	瀬川菊之丞 上上吉 (二七)	大谷広次 上上吉 (二六)	富沢門太郎 上上吉 (二五)	荻野伊三郎 上上吉 (二四)
弥木菊松 上上 (五)	三条かん太郎 上上吉 (四)	嵐小伊三 上上 (三)	市川團十郎 上上吉 角かづら (二)	市村「空白」 上上吉 (一)

図版2 「中村富十郎〈三年立たら／極の字が付〉ませう双六」区画割

評判記が与えたランクが位付で、早くは中の位付もあつたが、このころには、上からはじめて上上、上上吉と進み、上上吉となれば押しも押されぬ人気役者と見なした。そしてこれを上まわる稀者には、上上吉に極の字を加えて極上上吉とした。この位付は元禄期以来の名優初代芳沢あやめ(二六七三―一七二九)のために考案され、宝永八年(一七一―)にはじめて与えられた。初代富十郎はあやめの三男である。

この双六は、富十郎が父のように出世することを願って作成されたものということができよう。

二、享保期の江戸劇壇

「中村富士郎三年立たら極の字が付ませう」——富士郎も、あと三年経ったら位付が極上上吉となるでしょう——、その「三年」は、どの時点からをいうのであろうか。元号としての享保年間は西暦にして一七一六—三六年となるが、芸能史でいう〈享保期〉は、その前後の宝永（一七〇四—一一）・正徳（一七一—一六）と、寛保（一七四—四四）・延享（一七四四—四八）・寛延（一七四八—五二）を含めて扱うことが適当である。歌舞伎が第一次の大成に達した〈元禄期〉は宝永初頭に終焉し、そして第二次の大成ともいべき〈天明期〉への展望は宝暦（一七五一—六四）に開けるためである。

それでは半世紀弱続く享保期のうちのいつごろの劇壇状況を、この双六はあらわしているのだろうか。双六には年記もないが、一七名の役者がその位付とともに記されている。役者たちの動向から内容を分析してみたい。

一七名の配列を見わたしてみると、必ずしも出世双六のように位付順に並んでいるわけではないが、上上の位付の四名は外縁に、「上り」の手前となる区画（一七）には瀬川菊之丞、（一六）には大谷広次と立者が配されている。また江戸歌舞伎の大名跡、市川団十郎の名が、振りだしに隣接した区画（二）に見える。享保期の団十郎は、二代目（一六八八—一七五八）もしくは三代目（一七二二—四二）である。二代目は父初代の横死をうけて宝永元年（一七〇四）に団十郎襲名、享保二〇年（一七三五）冬に養子升五郎に三代目を譲り、自身は海老蔵を名のるが、三代

目団十郎となった升五郎は七年後の寛保二年に早世してしまふ。四代目団十郎の誕生は、二代目松本幸四郎が幸四郎から改名する宝暦四年（一七五四）冬まで待たなくてはならない。団十郎の動向は、享保二〇年冬を境に、それより前は二代目、あとは三代目となり、寛保二年以降しばらく不在となるものの、海老蔵（前名二代目団十郎）の活動が続行したということになる。

この双六の団十郎には「角かづら」の添書があり、絵は前髪のある元服前の姿で描かれている。角鬘とは角前髪の鬘のことで、前髪を剃りこんだ角前髪は元服直前の若衆の髪型である。歌舞伎の役柄は、立役、若女方、敵役、実悪、道外方、花車方、若衆方、親仁方、子役などに分かれ、いくつかは時代とともに盛衰した。端役を勤めるか、けだしの少年役者たちは、役柄の別なくまとめて色子と呼ばれ、評判記では役者目録の色子之分に名前だけが並べられ、本文評文は略される。ところが似たような年ごろでも、色子ではなく若衆方・部や子役・部に入る場合がある。とくに二世役者にはこうした例が多い。若衆方や子役は（色子も）一定の年齢になると、立役や女方などに役替するのがふつうである。^③

三代目団十郎（前名升五郎）は、享保二〇年十一月の顔見世興行で襲名を披露する。あけて二一年正月刊の評判記『役者福若志』江戸之巻は「角かづら若立役之部」を設け、ここに「上上吉 荻野伊三郎」について「上上白吉 升五郎事市川今団十郎」の名を掲げる。なお父二代目のほうは、「極上上吉 団十郎事市川海老蔵」として江戸惣巻軸（評判記の江戸之巻役者目録の末尾）に記載する。

伊三郎は、双六の区画（一四）にも「たちやくからよく女かた二のりかゑ」とあるように、女方から立役に役替

したところである。女方も「元服」して立役となることがある。双六中の区画(四)に「女かたよりたちやく」として描かれる三条勘太郎は、正徳年間にデビューして享保のはじめに女方に進み、伊三郎よりもほんの一足早く、享保二〇年冬に立役之部に入るといふ、典型的な役柄の変遷を示す。二一年『役者福若志』では「角かづら若立役之部」ではなく立役之部に入っており、役替したばかりでも一五人中四位に配列されたのは、女方としての年功が加算されたものであろう。

翌元文二年正月刊『役者多名卸』江戸之巻にも「角かづら若立役之部」があり、伊三郎、三代目団十郎はここに入る。同年同月刊『役者満友家』(江戸板)は若衆方之部に両者を配列し、続く三年正月刊『役者年徳棚』、同年三月刊『役者紋楊柳』江戸之巻も、「若立役之部」に二人を入れる。四年正月刊『役者大極舞』江戸之巻では「角かづらの部」に団十郎を残して伊三郎は立役之部に移行し、五年正月刊『役者恵宝参』江戸之巻になると団十郎も立役之部に移行、四年間続いた「(角かづら)若立役之部」は廃された。この変則的な部立は、このとき女方から役替した伊三郎と、一五歳で襲名した三代目団十郎のために設けられた印象がある。

双六を画風から大まかに享保期のもものと見たが、そこに反映された劇壇状況は、おもに三代目団十郎の動向から、享保二〇年一二月のその襲名以降、評判記に「(角かづら)若立役之部」がおかれた元文四年度までにしほることができそうである。

芝居の年度は一二月にはじまり、翌一〇月に終わる。正月刊行の評判記は一二月の顔見世興行評を、三月刊行の評判記はあけて初春の二の替興行評を掲載する。役者は原則として一年契約で、特定の座(劇場)に出勤する。年

度が変われば座を移ることもあり、土地を移動することもある。京・江戸・大坂を往来することが多く、評判記は三巻に分けて三都の役者たちの情報を伝える。名古屋そのほか地方巡業もあり、休みということもあり、そうした場合の消息はつかみにくい。

『役者福若志』の段階における一七名の役者の所在また位置づけを確認すると、一五名が江戸にいたことがわかる。これら一五名の情報を『福若志』江戸之巻・役者目録から抜きだし、双六の区画番号とともに左に示した。

▲立役之部

上上吉 (二六) 大谷広次 市村座

上上吉 (八) 市川団藏 川原崎座

上上白吉 (四) 三条勘太郎 中村座

上上白半吉 (二〇) 中村七三郎 中村座

▲角かづら若立役之部

上上吉 (二四) 荻野伊三郎 川原崎座

上上白吉 (二) 升五郎事市川今団十郎 市村座

▲実悪之部

上上吉 (二二) 市川宗三郎 市村座

▲敵役之部

上半白吉 (六) 大谷竜左衛門 市村座

▲若女方之部

白半極上上吉 (二七) 瀬川菊之丞 市村座

上半白吉 (二三) 姉川千代三郎 中村座

上半白吉 (二一) 瀬川菊次郎 市村座

上半白半吉 (七) 坂田市太郎 中村座

上上白半吉 (九) 袖崎菊太郎 市村座

上半上 (三) あらし小伊三 市村座

▲三座之太夫元

上半上 (一) 市村竹之丞 太夫元

位付は評判記のほう細かい。江戸には中村座、市村座、森田座(のち守田)の三つの大劇場があり、これらを本槽と呼ぶ。江戸の座元は、興行を許可され、劇場建造物を所有し、一座の役者を抱えるという権力者であり、しかもその権限は世襲された。金主(出資者)は別におり、表面化することは少ない。座元には経営リスクも集中し、借財等から興行不能となったときは、都座、桐座、河原崎座(川原崎とも)の控槽が、本槽に替わって興行を引き

受けるシステムであった。劇場が休業になると、周囲の芝居町への集客に影響するためである。座元は太夫元とも呼ばれ、その後継者である若太夫とともに、舞台上立つこともあれば、そうでない者もいた。双六の振りだしの区画（一）に市村とあったのは、舞台活動も盛んだった市村座の座元のほかにあるまい。『福若志』では市村竹之丞とある。双六が姓を記して名前の部分を空白としているのには理由があるようだ。太夫元は役柄ではないが、評判記の役者目録のさいごに立項され、本文には評文もある。

各座二〇名前後もいる色子之分はのぞき、三座之太夫元は加えると、『役者福若志』江戸之巻・役者目録に掲出されるのは全七八名。立役之部や若女方之部はもともと人数が多く、双六はそれぞれの部立からバランスよく役者を抽出したといえる。太夫元として市村竹之丞が挙げられたのは、積極的に舞台出演し、役者絵にもひんばんに描かれるような太夫元は竹之丞しかいないからだろう。

区画（一五）の富沢門太郎は江戸之巻ではなく京之巻に掲出され、この年度は京都出勤である。また区画（五）の弥木菊松はこの年度動向不明で、その前の二〇年度も不明、一九年度は矢木菊松が大坂に出勤している。この矢木菊松と弥木菊松は同一人物とみてよい。双六に「はるく」となごやから河原さき座」とあるところから、菊松が江戸在勤で河原崎座所属の年度が、双六の状況と重なることが期待される。

では、翌元文二年正月刊『役者多名卸』ではどうだろうか（享保二十二年は四月二八日改元して元文元年）。同様に役者の所在を確認すると、一七名ともが江戸在勤である。団十郎には「おやく」から三代目の市川丸」との添書がある。

▲立役之部

上上吉 (二六) 大谷広次

中村座

上上吉 (八) 市川団蔵

川原崎座

上上白吉 (二〇) 中村七三郎

川原崎座

上上半白吉 (四) 三条勘太郎

市村座

▲角かづら若立役之部

上上吉 (二四) 荻野伊三郎

中村座

上上白吉 (二二) 市川団十郎

川原崎座

▲実悪之部

上上吉 (二二) 市川宗三郎

市村座

▲敵役之部

上上半白吉 (六) 大谷竜左衛門

市村座

▲若女方之部

上上吉 (二七) 瀬川菊之丞

中村座

上上半白吉 (二五) 富沢門太郎

市村座

上上半白吉	(一一)	瀬川菊次郎	中村座
上上半白吉	(二三)	姉川千代三郎	市村座
上上半白吉	(五)	弥木菊松	川原崎座
上上半白吉	(九)	袖崎菊太郎	川原崎座
上上半白吉	(七)	坂田市太郎	市村座
上上	(三)	嵐小伊三	中村座
▲三座太夫元			
上上吉	(一)	市村竹之丞	太夫元

(五) 菊松は河原崎座所属であり、評文本文に「此人去八月に名古屋より、川原崎へ御下り」とあり、双六の「はるく」となごやから河原さき座」という添書と一致する。(二五) 門太郎は、役者目録に「去夏から御下り」、評文本文にも「此君九年以前酉の霜月に、大坂より京嵐小六座へお上り有(中略)去冬暇乞狂言、くずのはの道行ノ所作、大入で首尾よふお下り」とあり、二一年度夏に京から江戸へ下って市村座に出勤したことが確認できる。

(九) 菊太郎の双六添書に「ゑひがひげにとりついて」とある意味も、評文本文の「市村座より市川殿につれられ、木挽了初面の顔みせ」によって判明する。前年度、菊太郎は海老蔵、団十郎父子とともに市村座所属であったが、この年度、彼らはそろって河原崎座に移っている。位付極上上吉の海老蔵は河原崎座の座頭となったことは疑いな

く、まだ上上吉にいたらない菊太郎の移籍に関与してもふしぎではない。

また『役者多名卸』役者目録では、(一五) 富沢門太郎、(一一) 瀬川菊次郎、(一三) 姉川千代三郎がこの順に配列され、三名ともに位付は上上半白吉ながら、門太郎は吉の字のほんの一画が、菊次郎と千代三郎は吉の字の左半が黒められ、菊次郎・千代三郎には釣りが掛けられ、両者の力量の拮抗していることが示される。さらに評文本文でも三者はこの順に並ぶが、門太郎は吉の字が一画黒んだ半白上上吉、菊次郎は上上半白、千代三郎は黒上上吉とされ、本来なら千代三郎が門太郎を上まわる。目録・評文本文とも、門太郎が先に掲出されたのは初下りの祝儀と考えられる。

続く三年正月には『役者年徳棚』、三月には『役者紋楊榎』があるが、(二七) 菊之丞・(一一) 菊次郎の名が江戸之巻に見えなくなる。瀬川菊之丞は、江戸時代に五代まで続いた江戸女方の名門である。この菊之丞は初代(一六九三―一七四九)で、享保一五年冬に京から下って江戸に腰を落ちつけ、弟菊次郎も呼び下し、双六の区画(一七)に「わか女がたのすいいち」とあるように江戸女方の筆頭となっていたが、元文三年度から菊次郎を連れて上方に里帰りをする。さらに江戸立役の実力者である(一六) 広次も上方に同行した。菊次郎は二年で上方から戻るが、菊之丞と広次は四年のあいだ京大坂に滞在した。そして元文五年度には三代目団十郎、伊三郎とも、立役への代替にもなう角鬘の移行期を過ぎ、評判記の「(角かづら) 若立役之部」もなくなったことを考え合わせると、双六のこれらのコマは、元文二年度江戸劇壇の状況を忠実に映しだしていると結論づけることができる。

区画(一六) 広次の添書に「せつせうせきの狂言」とあるのは、元文二年度中村座の顔見世狂言(前年一月よ

り上演)『国富殺生石』のことだろう。『役者多名卸』に詳しい評文が掲載される。顔見世狂言に言及するとなると、評判記と同じく年内の発売はむずかしい。また(一)市村「竹之丞」は、翌三年度の顔見世から八代目宇左衛門と改名する(のち羽左衛門)。板元は竹之丞改名のニュースを入手しており、そのため板下を竹之丞とせず、新しい名のりを彫り込むつもりで用意しながら、それを果たせないまま板行にいたった可能性が高い。板木の改変は存外ひんばんにおこなわれ、いったん「竹之丞」と彫り込んで、その部分をくり抜くようにさらって入木・埋木をほどこし、そこに新たに「宇左衛門」と彫り直すことは容易である。(一)市村姓の下の不自然な空白は、新情報を刻みそこねたために生じたものと想像される。年度が進んで次の顔見世が近づけば、改名の詳細が確定したはずで、元文二年正月以降、夏ごろまでに、作成時期をせばめることもできるだろう。

三、書誌的な不整合

資料中央の「上り」、区画(一八)も検討しなければならない。この横長の区画には、富十郎、中山新九郎、菊之丞の三名が、役名および舞台姿の全身像とともに描かれる。

菊之丞は、区画(一七)にもあらわれた当時江戸女方の大立者である。デビューは宝永五年冬の大坂で、当初位付は低迷したが、享保八年度から京都で座本を勤めたのが出世の糸口となり、初代あやめとも同座の機会があった。元禄盛期から活躍し、役者としてはじめて極上上吉の位にのぼったあやめは、菊之丞にとって女方の神様のような

存在であり、あやめから直接受けた指導は貴重な経験となった。このころ江戸では上方育ちの女方を歓迎しており、菊之丞も享保一五年冬、江戸へ招かれた。下り女方は二、三年ほども江戸の舞台を勤めると上方へ戻るのを常としたが、菊之丞は江戸に腰を据えた。

享保二一年正月刊『役者福若志』江戸之巻は菊之丞の位付を白半極上上吉としたが、翌元文二年正月刊『役者多名卸』江戸之巻ではただの上上吉に戻り、四年正月刊『役者大極舞』大坂之巻では大上上吉となる。花はあつて上上吉は上まわるものの、極上上吉と認めるには実力不足といった評価である。六年正月刊『役者懐中曆』大坂之巻で黒極となるも、翌寛保二年正月刊『役者柱伊達』江戸之巻では半白極に戻され、四年正月刊『役者子住算』江戸之巻で再び極上上吉となり、ようやく極の字が安定する。このとき五二歳。菊之丞がすんなり極上上吉におさまらなかったのは、その芸質が身体表現（所作事ないし舞踊）に傾斜していたのに対し、元禄期以来の評価基準が言語表現（科白）を重視していたためと推察される⁵⁾。

初代あやめには多くの子があり、三男の富十郎は立役中村新五郎の養子となり、新五郎の女房役者である佐野川万菊によって一流の女方に育てあげられた。享保一四年度に京都でデビューし、一六年度には万菊らに連れられて早くも江戸下りした。出世の早かった万菊は菊之丞より先を進んだが、やがて追いついてきた菊之丞と評判記の順位を争ったこともある。逆に富十郎は菊之丞の後輩ということになる。里帰り中の菊之丞と同座し、「娘道成寺」を踊る菊之丞の背後で伴奏の太鼓を打ったこともあり、菊之丞の「百千鳥娘道成寺」（寛保四年中村座初演）を先行曲として、女方舞踊の大曲「京鹿子娘道成寺」（宝暦三年中村座初演）を創演したのは富十郎の大きな功績である。

寛保二年度から二年間、宝暦三年度（一七五三）からは八年間、明和八年度からも八年間、江戸に滞在し、関東での人気も抜群だったが、本拠は上方に置き、おりおり江戸下りするというスタンスをとったのが菊之丞との大きなちがいである。

新九郎（一七〇二―一七五）は初代で、享保九年度から立役として評判記にあらわれるが、このときもう二二歳であつたことを考慮すると、デビューはもつと早く、この名前に改名したのがこの年度だったのだろう。⁽⁶⁾ 寛保二年度に江戸に下っているが、これが最初で最後の下江で、それ以外はほぼ大坂で活動する。

菊之丞と富十郎の関係を敷衍すると、江戸女方の筆頭である菊之丞を追って、富十郎も（あと三年も経ったら）極上上吉になるほどの出世を、という意味あいがある資料からは読みとれる。しかしながら前章の調査により導かれた作成時期、元文二年度には富十郎はもちろん、新九郎も大坂在勤である。そのとき江戸にいない役者の名を冠した双六を板行するものか、商品としてどれほどの需要があるのか、疑問を禁じえない。

新九郎が単年度江戸の劇場に出演した寛保二年度には、富十郎も江戸にいる。中村新五郎、万菊、富十郎、新九郎が一団となって江戸中村座に下ったのであつた。寛保二年度中村座の顔見世狂言『塩治判官故郷錦』において、富十郎は「手かけさ衣と成（中略）かりにくわいらいしに成、人形をつかいて（中略）次に又狐と成て、花笠踊らんぎよく、しやつきやうの、略の所作事迄」を、新九郎は同狂言に「八はたの六郎と成（中略）次に薬師寺次郎左衛門と替名して（中略）大話に成つて（中略）氣違ひと成、道成寺の所作ごと」⁽⁷⁾を勤めた（寛保二年正月刊『役者柱伊達』江戸之巻）。そして菊之丞は同じとき、市村座の『姿絵女業平』に「岩戸左衛門女房うら葉と成（中略）二番

めに似せなり平と」主演していた(同前)。これらの役名はすべて双六の(二八)「上り」区画に記された役名と一致する。富十郎にいたっては、花笠を頭に被り、両手にも持った双六の絵姿も、評判記の挿絵とそっくりである。

つまり、双六の区画(一)から(一七)までの内容はあきらかに元文二年度の状況と一致しているにもかかわらず、(一八)「上り」区画だけが五年後の寛保二年度顔見世の役名を掲載しているのである。「中村富十郎(三年立たら／極の字が付)ませう双六」という題名自体、元文二年にはそぐわず、寛保二年のものにちがいない。なぜ一枚の双六のうちに、このように整合を欠いた情報が同居することになったのだろうか。

この芝居双六は、まずは元文二年にいったん出板された。そのときおそらく区画(一)の市村の名は空白のまま板行となった。そして寛保二年、富十郎や新九郎らが江戸に下ったとき、それを当て込んで、再び芝居双六が出板された。そのとき板木を一から彫る手間を惜しんで元文二年の板木を丸ごと彫らずにすんだので、短期で製作保二年の情報に合わせて改刻し、題名も更新した。大判の絵双六の板木を丸ごと彫らずにすんだので、短期で製作できただろう。区画(一)の空白も訂正しなかった。これがこの不整合を説明する答えだとおもわれる。題名は子持杵に囲まれているが、資料右下の題名部分の匡郭と、区画(一)の匡郭はまっすぐつながっていない。奇妙なたつきが改刻の痕跡である。また(一)から(一七)までの文字や絵の摺は、ところどころ見にくく、読みづらいが、区画(一八)は文字、絵ともくっきりしている。元文二年の板木の(一八)の部分をさらい、そこに別の木を埋め込んで彫ったが、板面の高さが完全にはなく、入木部分のほうが高かったために、この部分がいくぶん濃く摺刷されたのではないか。資料の裏面を調査すれば確実性が増すが、貼込帖に仕立てられているため、それは

できなかった。

近世期の歌舞伎作品について調査するために、種々の資料を収集してきた。役者評判記は比較的人手しやすく、台帳（台本）は残っていれば有効有用であり、台帳に準じる絵入狂言本や根本などもある。こんにちのパンフレットやポスターにあたる微細な芝居番付群からは興行の進行について知ることができ、プロマイドにも相当する役者絵（浮世絵）は舞台面を写す。これらは現存しているかどうかはともかく、江戸時代の演劇にとってはレギュラーな資料である。対するに双六はあくまで遊戯の道具であり、浮世絵としてもおもちゃ絵というところだろう。芝居双六はイレギュラーな資料といえる。それでもたまさか所在を知った芝居双六から、予想外に有益な情報が得られることがある。演劇情報を応用して芝居双六を考証することができ、同時にその芝居双六から未知の演劇情報もたらされる。

「中村富十郎〈三年立たら／極の字が付〉ませう双六」は、考証の過程で書誌的不整合が発覚した。それでも寛保二年の時点で、富十郎には、ほどなく菊之丞に次ぐ一流の人気女方となるだろうとの期待がかかっており、それが出版の原動力となったことが看取されるのである。この双六の作成意義はそこにある。

富十郎が実際に極上上吉の位付を得たのは、寛保二年より七年後の寛延二年（一七四九）、弱冠二八歳であった（同年三月刊『役者花双六』京之巻）。双六の題名のように「三年立たら」とはいかなかったにせよ、舞台人生の前半で足ぶみし、後退さえあり、五〇歳を越してようやく極上上吉に落ちついた菊之丞に比して、その歩みはあまりにも

順調だといわなければならない。菊之丞が他界したのがその寛延二年であった。天明五年（一七八五）には富十郎は父あやめをも上まわる、歌舞伎一道惣芸頭（女方のみならずあらゆる役柄を通じての第一人者）という極位を授けられ、翌年に世を去った。

注

- (1) 高橋順二氏「絵双六の歴史」（同氏編著『日本絵双六集成』柏書房 一九七〇年）。
- (2) 関忠夫氏「『双六類聚』雑考」（『MUSEUM／東京国立博物館美術誌』二二〇号 一九七〇年五月）。
- (3) 小野川宇源次（一六八三頃—不詳、初代佐野川市松（一七二二—一七二六）など、若衆方を長く勤めた例もある。近藤瑞男氏「小野川宇源次の転機」（『元禄歌舞伎の展開——甦る名優たち——』所収 創生社 二〇〇五年）。
- (4) 位付は時代が下るにしたがって細分化された。この時期にも評判記では、「上上」に「吉」の字を付加するのに、「吉」の字を白抜きにしたり（＝上上白吉）、字の一部を白抜きにしたり（＝上上白吉）、字の一部分だけにしたり（＝上上半吉）、それらを組合せたり（＝上上半白半吉）、さまざまな工夫が凝らされた。
- (5) 拙稿「元祖瀬川菊之丞と享保劇壇」（『近世中期歌舞伎の諸相』所収 和泉書院 二〇一三年）。
- (6) 『新刻役者綱目』に「とつとむかしは松本嘉平次」とあり、前名松本嘉平次か。
- (7) 「八はたの六郎」は漢字表記すれば八幡六郎であり、読みは「やはた」「はちまん」とゆれがある。
- (8) 拙稿「芝居双六にみる演劇情報——『けいせい福引名護屋』と道成寺物の地理」（『演劇研究会会報』四五号 二〇一九年）。